

# 第3回 社会教育委員会議 議事概要

## 1 議事

### (1) 報告事項

ア 令和4年度札幌市教育費予算について

イ サッポロサタデースクール事業令和3年度実施報告及び令和4年度実施方針について

### (2) 協議事項

協議テーマ「人生100年時代の生涯学習」

## 2 日時

令和4年(2022年)3月28日(月)10時00分～12時00分

## 3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

## 4 出席者

### (1) 委員(出席9名)

鈴木委員、出口委員、臼井委員、高橋委員、出葉委員、中野委員、本間委員、

オンライン参加：一戸委員、榊委員

欠席：安田委員

### (2) 事務局(8名)

丹尾生涯学習部長、村上生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、逸見推進担当係長、寺崎社会教育担当係長、前崎職員、中原職員、横山職員

## 5 開催形態

公開(マスコミ関係者1名傍聴：北海道通信社1名)

## 6 会議内容

### (1) 配布資料

資料1-1：局別施策の概要(教育委員会関係分)

資料1-2：社会教育関係団体への補助金の交付について

資料2：サッポロサタデースクール事業令和3年度実施報告

サッポロサタデースクール事業令和4年度平日拡大試行実施方針

令和4年度サッポロサタデースクール事業平日拡大試行実施要領

資料3 : 協議資料

(2) 報告事項

① 令和4年度札幌市教育費予算について

事務局から「局別施策の概要」、「社会教育関係団体への補助金の交付について」を用いて報告（村上課長）

② サッポロサタデースクール事業令和3年度実施報告及び令和4年度平日拡大試行実施方針について

ア 事務局から「サッポロサタデースクール事業令和3年度実施報告・令和4年度平日拡大試行実施方針」、その他、補足資料を用いて説明

イ 主な意見・質疑応答

- ・ 平日に拡大するのは大変よろしいことだと思うが、結局は先生が関わらなければならない。そうすると余裕のある学校とない学校が出てくると懸念したところ。また、要綱の中でコーディネーターが実施したプログラムの報告書を作成するとの記載があるが、この他にも運営協議会が実施状況を報告するといった記載もある。この報告とは同じものを指しているのか。

次に、社会教育委員会議の役割として、実施方針の検討や検証・評価を行うとあるが、やはり評価するためには検証が必要だと思うので、引き続き視察に誘っていただければと思う。

最後に、謝礼についてなのだが、外部人材の講師とあるが、宿泊費や交通費も含む内容なのか。また単価が一番高い区分に「その実績が特に評価され著名である者」とあるが、どのような講師を想定しているのか。（高橋委員）

→ 平日拡大実施については、教育課程内の授業もプログラムの対象にしたことが一番大きな見直しである。授業の中で講師の方を招くことになるだろうが、講師や先生、学校、地域との間に運営協議会が入って調整することで、先生の負担が軽減できるのではないかと考えている。実際にはやってみないと分からない部分もあるが、先生の負担が軽減したかも含め、検証していきたい。報告書については、同じものを指している。コーディネーターを主体に作成いただきたいため、あえてコーディネーターの業務

内容の欄にも記載するかたちとした。視察についてはコロナの状況にもよるが、今回から平日試行実施となるため、これまでと違うプログラムについてはご案内していきたい。講師謝礼については、この中に交通費は含まず、別途実費相当分の旅費をお支払いすることとなる。また区分についてだが、これまでに当該項目でお支払いした例はないのだが、講師の実績によって対応することとなる。（寺崎係長）

- ・ 誰かが見ることで色々な気づきがあると思うので、是非視察させていただければと思う。（高橋委員）

### (3) 協議事項

#### ① 協議テーマ「人生 100 年時代の生涯学習」

##### ア 事務局から「協議資料」を用いて説明（村上課長）

- ・ テーマを取り扱うこととなった背景
- ・ 各世代の特性について
- ・ 具体的な論点について

##### イ 主な意見・質疑応答

- ・ 協議事項の最初のテーマとして「人生 100 年時代の生涯学習」という非常に大きな内容を取り扱うこととなった。こうしたテーマをもとに、各世代における生涯学習の在り方などを議論していくことで、人生それぞれの時期において、どういった学びが必要か整理することができればと思う。皆さんのこれまでの活動経験をもとに、課題やアイデアなど意見交換をさせていただきたい。（鈴木委員）
- ・ 札幌市生涯学習センター「ちえりあ」で社会人向けにビジネス関連の講座を開いている。また、大学でも講師をしており、学生の就職相談も行っている。その中で最近の傾向として気になったのが、当然ながら志望する会社への就職を目指す生徒がいる一方で、中には最初から転職に有利な会社へ就職を希望する生徒が多くなっていること。そういう意味では、人生を何段階にも分けて捉えている生徒が出てきており、時代の変化を感じている。自分たちの仕事に対する考えが変わるかもしれない大前提の中にあるのだろうと思う。

この資料、大変シンプルにまとまっているが、実態としてはこの成人期と

高齢期は特に色々な段階に分かれるだろう。例えば、40歳前後において一つの転機が来ると思う。これまでの自分の仕事を見つめ直して、これからどうしたらいいか考える時期であり、あるいは仕事の幅を広げたいか、もっと大きなことに挑戦したくなる、そういった一つの大きな山場を迎える。そして50歳前後になると自分が最終的にどのような人物になるかが見えてくる。

それから高齢期の方、65歳ぐらいになって新しいものを見につけたいという向上心を持つ方が多いように感じる。学びによって自分の能力を広げていく、好奇心や向上心にあふれる人というのは充実して見える。常に社会と関わって、なおかつそれを楽しんでいるのが大変素晴らしい。そういったことが生涯学習によって支えられているのだということを非常に感じる。色々な人生、様々な生き方をしてきた中で、各世代で感じたこと、それらが言葉となって一つ一つ積み重なると、これから生きていく方々にとって参考になるのではないかと感じる。（臼井委員）

- ・ 私も大学にいるが、就職活動については非常に感じる場所である。転職するにしてもスキルをつけていかないと期待するような結果にはならない。そういった意味では、学生等の若い世代の学びに対する欲求が高まっているのではないかと感じる。（鈴木委員）
- ・ 私は退職したのち、人と社会の関わりが薄れていく中で、生きがいのようなものを見つけないかと思って始めたのがボランティア活動である。こうした関わりで思ったのは、日々、生きがいを感じながら生活すること、この全てが生涯学習につながるのではないかとということ。ボランティアを通じて新しい社会とつながり、新しい人とつながっていると実感している。

自分なりに今回テーマを持っている。同世代は皆、スマホを持ってはいるのだけれども、苦手であり、世の中で活用できていないというのが現状。コロナのワクチン予約で非常に感じたところで、スマホ等、今の時代のICTに対する知識が不足しているなど思う。

また、札幌遠友塾自主夜間中学でボランティアをしているのだが、もともとは戦後に学校へ行けなかったような方たちを対象に始めたものが、30年ほど経ち、現在は、高校を出た50代や80代の方も勉強し直したいと来られて

いる。こういった学びを求められている方が非常に多いのだなと感じており、昼間にもっと学び直しのような講座が行われればと思う。（高橋委員）

- ・ 私は 20 年余り文部科学省で仕事をさせていただいた。文部省が局の名前を変えたため、都道府縣市町村の社会教育課が軒並み生涯学習課に名称変更したのだが、やっていることを変えずに組織名を変えた背景があり、社会教育関係者は危惧した。それから 30 数年たって、生涯学習の本当の意味が皆さん方に伝わってきたのかなと感じている。長く関わる中で、学校教育と違い、生涯学習、社会教育という立場は弱く、無くてもいいようなことを言われ続けてきた。学ぶということは、確かに学校教育と違って自由なため、必ずしもやる必要がないという意識がどこかにあり、個人に委ねる部分が非常に大きい。だからこそ、個人に委ねる部分にどうアプローチしていくかが、行政の役割として非常に大きいと思っている。

今の専門は公民館、特に地域づくり。地方創生の取組の中で、地域運営組織や、小さな拠点という取組は総務省や内閣府が中心に行ってきた。しかしながら地域づくりはもともと、公民館の役割だったのではないか。それが紆余曲折あって、公民館は学級、講座をやっていけばいいのだというような風潮で、存在意義そのものが問われてきている。だが、戦後の復興の拠点であった公民館が、もう一回この地域づくりに関わるということがとても大事だと感じており、研究を進めている。札幌市で構想にまとめられている学びを地域づくりに生かすということは、とても大事なことだと思っている。

生涯大学システムや、道にも道民カレッジがあるが、全国でいろいろ取組まれているものの、その存在意義は結構問われてきており、うまくいっているところはほとんど無いのではないだろうか。それはなぜかというと、学ぶことが目的になっているというような気がしてならない。それをアウトプットする機会というのは本当にあるのだろうか。アウトプットの方法としては、生涯、仕事を持って取組むということも大事な選択肢の一つだと思うが、それと同時に、地域づくりに関わるとか、ボランティアに取組むということが、とても大事なのではないか。だからこそ、学んだことを生かす場として、働くことや、ボランティア活動、自治会活動をするということがとても大事だと思っている。アウトプットの評価というのがなかなかできていな

い。市民カレッジの中で評価すべきは、何時間学んだというよりも、その活動を何時間生かしたかということの評価に結びつけていくべき。学びっ放しではなく、それを生かす場というものをどうつくっていくのか、その生かしたことをどう評価していくのかということが、やはり今後の生涯学習を進めていく上ではとても大事なこと。

自治体活動は、ほとんど関わらない人たちが多く、加入率も下がっている。今後、人口が減ることは間違いなく、そのことで税収が減り公共サービスが今のまま継続できないかもしれない。だからこそ、お互いに支え合う社会をつくっていかねばいけない。そのための基礎となるのが自治会、町内会の活動になる。そこに積極的に関わっていけるような仕組みや機運がとても大事なことだと思う。

日頃、大学生を教えているのだが、学生にとってみれば、生涯学習というとお年寄りがやるようなイメージがあり、ぴんときていない。そのため学生には、大学4年間で学ぶ内容は陳腐化するということをいつも説明している。これだけ変化が激しい世の中で、時代に合わせた学びをしっかりとやるために、いつでも新しいことを吸収すること、そのために生涯学習というものが必要なのだと説明している。（出口委員）

- ・ 一つ大きく感じているのは、私が新卒で教壇に立った頃から見ると、社会的な感覚や社会構造の変化が随分あったと感じている。例えば、公務員の定年が延びていくことで、生涯100年という中で、成人期から高齢期の境目も少し先に延びていくことになる。ここまで来ていきなりゴールが延ばされたといった所感を持った者もいる。

先ほど、サタデースクールの検討がなされたときに、教員の負担軽減という言葉を繰り返しキーワードとして出していただいた。これも社会構造や感覚が随分変わったと感じたことの一つ。教員というのは業後と言わず、子どものために時間を割いてでも一生懸命やる者こそいいと言われてきた。ワーク・ライフ・バランスからしたら破綻した状況と言える。しかしながら、教員も家庭があり、一個人であるため、今、現場では若い教員に働き方改革という流れの中で、ワーク・ライフ・バランスを取ることを随分言うようになった。私たちのこれまでの感覚では、仕事以外の人間関係を築く重要性

や、できるだけ早い段階で人生設計を考えること等、ワーク・ライフ・バランスはとりあえずさておいて、目の前のことに猛烈に一生懸命やっていくという感じであった。そのあたりの感覚が随分変わってきている。

それから、先ほど話題に上がったように、仕事に対するキャリアデザインも随分変わったと感じた。昔は終身雇用というのが就職のイメージであったが、今は手に職をつけるとか、キャリアをしっかりと積んでいくことで、転職も視野に入れる感覚に変わっている。

学校現場では、コロナの影響があって急激にICT化が進み、子どもたちは1人1台タブレットを持っている。かつて言われていた未来の学校が現実化している。こうした急激に進んだ状況に対して、子どもたちの適応の速さに驚いた。デジタルネイティブと言われるような、私たちの世代でなかなか馴染めないものを、子どもたちは最初から身につけることとなり、感覚が随分変わってきたと感じた。

子どもたちには、時代の流れが早い中で、かつてのような物事を物量的に覚えて暗記的に学ぶのではなく、変化していく世の中でどのように生きていくか、どうやって変化に対応していくか、学び方を身につけるのかということを経験している。そうした中で子どもたちは流れに乗れているのに、今、私たちの世代が一番変化についていけない、社会の感覚や構造も変化しているのに、流れについていけないと感じている。これから現役の期間が延びて、ますます頑張らなければならない、そして学び続けなければならないという中で、私たちの世代の社会の変化への対応力をいかにつけていくか。子どもたちに教えるのと同時に、足元を見たら実は自分たちが一番必要なのではないかと感じているところ。（出葉委員）

- ・ この資料を拝見して、私の中で感じたのは、高齢期の生きがいの創出というところ。最近までシニア吹奏楽団というところに所属していたのだが、そこは、平均年齢が60何歳で、指揮者が90歳代という楽団。そこにいて感じたことは、なぜこのおじいちゃん、おばあちゃんたち、こんなに元気なのだろうと。2週に1回ぐらい練習あるが、その2週に1回の日を本当に楽しみに来っていて、年に2、3回ある演奏会は、演奏はそんなにうまくないと思うのだが、席がいっぱいになる。皆さん楽しんで帰っていく。お客さんは子

どもも大人も来ていて、もしかしたら生涯学習の行き着くところってこういうことなのかなと資料を見ていて思っていた。生涯学習、地域のつながりや勉強ということも確かにあると思うのだが、それよりも元気なお年寄りにどうやってなるかということも一つの大きなテーマだと思っている。

部活で吹奏楽をやっていた身として感じたのが、いわゆる燃え尽き症候群。部活動の目的が勝ち負けだけの話になってしまっていて、それは一つ間違いではないのだが、全国を目指した仲間たちなので、今、続けていない人を見ると、あんなにうまかった君たち、何で辞めるんだという気持ちになってしまう。

他にも、やりたい環境を続けられないというのものもある。PTAの活動をしているため、周りは子育て世代なのだが、子育て優先になってしまい、本当は趣味をやりたいができていない環境が大変多い。成人期でいうところの子育て世代も、できれば趣味をやれるような環境づくりが必要だと思う。そのためには、例えば仕事の関係も、残業ばかりやってきたのを経験しているので、それが今少しずつ改善されていることは一つ希望だと思う。アフター5以降の生涯生きがいとなるような趣味を続けられることが大事だと思っている。

また、音楽以外にも、最近、仕事の関係でフットサル場を造ったのをきっかけに、素人ばかり集めてやっている。初年度から30~40人の集まりができて、いまだに続いている。部活動からの趣味もあるのだが、こういった新しい生きがいをつくること、きっかけづくりをもっとつくっていくべきだと思っている。

学校の現場からすると、部活動ってやっぱり負担なのだろうと感じる。しかしながら、その部活動をやることによる人生経験や人付き合いの大切さとかは、学校の授業と同じように大事だと思う。この部活動がだんだん減少傾向になっている気がするが、地域、学校との連携、色々な経験をしている高齢者や、そういった方々とのつながりを部活動にも生かしていく。安全面だとか防犯面だとか、いろいろ問題があるのは分かっているが、うまく乗り越えて、生涯生きがいの創出に続くきっかけ、それをやはり学校の現場からもつくっていけるのではないかと考えている。（中野委員）



- ・ 生涯学習というのはとてもきれいな言葉で、いわゆる学びのこと。私も学校現場で勤めていたのだが、例えば小学生にどうして勉強するの？どうして学ぶの？と言うと、大体は、お母さんに言われたからと。あるいは先生に言われるからと。中学校へ行くと受験があるから、高校へ行くといい大学に行くために、大学生も就職活動があるから。社会人に入ると、スキルアップのためだ、出世のためだ、それが高齢期に入った途端に、ぼけ防止、社会孤立しないようにとなる。これでは生涯学習としてどうなのかなと感じる。

資料の表を見ながら考えたのだが、幼児青少年期の中にも、例えば小中高や大学等それぞれに、細い壁があるのではないだろうか。きっとこれが「小1プロブレム」、「中1ギャップ」、「高1クライシス」だとか、いろいろなことが言われているが、やはり壁というのがどうしてもある。この資料でいうと、幼児青少年期から成人期の間にはオレンジ線の壁があるが、高齢期に入るときにまた壁があり、三つのボックスになっているのだが、その壁を破るのが一番つらいときなのだろうと思う。

学生生活がずっとあり、やっと就職できた。会社に入ったけれどもこれでいいのだろうか、自分の選んだ就職、何百人の中の企業説明会に行き、いろいろな会社の話聞いて、何となく受かったところに入った。就職が決まったから周りにも喜ばれた。ただ、自分がやりたかったことってこれだったのかな。自分はこういう特徴やプラスの面があるけれど生かせるのだろうか。本当は営業みたいなのをやりたいけども事務職になってしまった。これを何十年も続けるのか、今までの幼小中高大学生、その期間というのが全く無駄になってしまうのではないか。この資料にあるような壁にぶち当たるときにいろいろ考えて、悩んでも難しいので、多分この壁が斜めになって、働きながら、また学びながら、義務教育をやりながらも、社会とのつながりを考え、社会ってどんな仕事があるのかなと考えるような機会が必要になる。

成人期から高齢期に入るとき、私も急に社会から孤立したような、これでいいのか、何かしないといけないのか、そう考えるようになった。学ばないと老けていく感覚。急に体が弱くなったような、明日元気になれるのかなとか、すごくマイナスになってしまう。自分が勤めていたときに全く考えないようなことを考える。だから、社会人が今すごく忙しい時期だけれども、高

年齢期に急に入るというよりも、高齢期に入る前に地域との関わりや社会との関わりを、仕事以外の部分で少しずつ体験していきながら高齢期に入る。緩やかな接続というのか、段差はやっぱり厳しいと思う。しかしながら、段差をなくせるのかということと多分なくせない。そのためには、少しでも斜めにして、緩やかな接続をしていくことが、この生涯学習ということかなと思った。

具体的にサタデースクールでいうと、例えば、アスリートが来たり、企業人が来て、実はこんな仕事があって、こんな役割があった。子どもたちは専門職しか意外と知らない。お医者さん、学校の先生、プログラマーとか社会にもものすごくたくさん仕事がある。そういうのを知る機会が全く会社に入るまでにないということが多い。自分で職業選択をできる子どもはいいが、多分ほとんどの人たちがそれをできないで社会に入ろうとする。そうするとやはりサタデースクールも社会に接する場として、地域の人は何やっているのかなと知る場としてとても大事になる。これから、土曜日に限らず、平日や教育課程でやると言っているが、本当にキャリア教育を目指したものも含めて大切になってくる。

成人期から高齢期に入るのも、このまま社会で勉強しないしていると本当に孤立してしまうなど感じており、そういった役割を多分生涯学習部は担っている。私たちは社会教育委員なので、接続の部分を少しでも有効に、いろいろな人たちが関わられるような企画をしたり、参加をしたり、紹介をしたりしていくということが役割だと、改めて感じた。（本間委員）

- 壁という話があったが、これにどう乗り越えていくかという発想が多いのに対して、実際には段差をなくすことができないというのはキーワードとして感銘を受けた。バリアフリーというスロープのように事前にいろいろな体験だとか、情報を得ることによって、段差をなだらかにしていくことが、非常に重要だと感じた。（鈴木委員）
- 3年前から教育委員会のスクールソーシャルワーカーとして活動させていただいている。その中で、今まで障がい児療育というところで見えてきたところと、学校現場でするソーシャルワーカーで見えてきたところと重なる部分があり、いろいろと考えるところがある。ソーシャルワーカーで入った中で家

庭教育の力が、結構差があると感じている。子どもたちはいろいろ御家庭の方針によって学校行きなさいとか、行かなくていいよとか、いろいろあるが、その中でやはり地域の力があると随分違うと感じる。学校にいろいろな活動、御家庭がある中で、地域で子どもたちを支えていくような仕組みがあれば、学校以外でも学びを保障され、また学校でも学びを得られるという、ぐるぐる回るようなシステムがあるとすごくいいと感じた。学校教育と社会教育の連動がすごく大切だと感じていた。

資料にある、地域づくりに向けた学びの推進というのが大切だと感じる。幼児青少年期のところの、この時期の学習が高齢期の生き方にも影響するとか、主体的に考えられる能力を養うため、社会と関わる機会の重要性というところが本当にそうだと思う。何かのためにとか、テストのためにとかだと、勉強嫌いなような感じになるが、本当はそういうことではなく、お花の名前をいっぱい知るとか、上を見て、空を見て、鳥がいることを知るとか、そういうことも勉強だということをたくさん知らせてあげたいと思っている。本質的な学びというところの楽しさが分かると、結局将来的にも、常にとどのステージでも学んでいこうと、生きる力ができていくのではないかと感じた。（一戸委員）

- どうしてこんなに日本で子育てをするのはつらいのか、大変なのかということをも悶々として、子育ての大変さをアカデミックに解明したいと思い勉強してきた。博士論文で「子育てにおける学習と連帯」というテーマで論文を書いた。どういう学習がどういう連帯を生み出していくのかというテーマ。もっと違う言葉で言うと、つながりを生み出す学びとはどういうものなのかということ。南区の「むくどりホームの家」と豊平区の「ねっこぼっこのいえ」にボランティアとして関わらせていただき、地域ぐるみで子どもを育てていく、特にむくどりホームでは、赤ちゃんからお年寄りまで障がいのある人もない人も、友達づくりの場になる、そういう地域での場になるところで活動しているのが研究のベースになっている。

先ほど、壁というお話が出ていたが、例えば私が専業主婦になって大きな壁を感じ、子育て中にも大きな壁を感じていた。その壁の中身は、社会から孤立しているという、それがすごく壁になっていたと思い返していた。そし

て、壁を破るときが辛いというのは、本当にそのとおりだと思った。そして、人生の葛藤場面とか、人生の困り事、それから人生の矛盾こそが学びのリソースになるのだと皆さんの話を聞いて感じた。（榊委員）

- ・ 私は、都市計画を専門にしている。教育研究の中でまちづくりの分野もあるのだが、自分自身いろいろな活動をするのが好きなので、地域の中で楽しく一緒に活動させてもらおうということに非常にはまり、そういった中でいろいろな活動をやってきた。

我々の活動する学会ではまちづくりは、つくるものではなくて、最近では「まち育ち」とか「まち育て」というような言い方をあえてすることがある。先ほどのキーワードで出ていた子育てとまちづくりも一緒に、誰かがぱっとつくるものではなくて、やはり一緒に育っていくというもので、まさしく社会教育と生涯教育もそうだと思う。それぞれの世代、それぞれの地域にも文化的な背景、地理的な背景があり、そういった中でまちと一緒に育っていく。その中で、社会教育、生涯教育というのは非常に重要なキーワードとなっていくのではないかと感じている。

地元の大学で、区民協議会に発足当時から関わっているが、例えば町内会や、地域のいろいろな活動の場には、比較的、性別でいうところの女性が多いように感じる。そういう中で区民協議会では、歴史パネル展というのを開いたことがあるが、男性がものすごく出てくる。趣味とか、学びの好奇心を誘うような、自分たちから出たいと思うような仕掛けが、きっかけがあると非常に素晴らしいと思う。経済学では「ナッジ」の理論とかという言葉があるけれども、自らそうしたくなるような仕掛けをしていく。そういった発想も、こういった社会教育とか生涯教育の場では重要になるという気がしている。

ボラベーション研究会というのをやっていて、ボランティアとイノベーションをくっつけた言葉。ボランティア自体も非常に素晴らしいが、ボランティアをやるだけでなく、それに少し違う要素を付け加えていくというのを仕掛けている。例えば学びということであれば、札幌には若い人が結構いっぱいいるので、ツアーを組んでバスに乗って、自分で交通費とか払ってボランティアに行く。それで独居高齢者の世帯などに行って、雪はね、雪か

きをしていくということなのだが、それだけでなく、その後に、喜茂別に行ったときは、例えば、一つは、酒が好きな方向けに、二世古酒造に行って、そういったお酒とか醸造について学ぶ。お酒じゃない方は、例えば雪下貯蔵野菜とか、子どもたち向けに雪について学ぶとか、雪の結晶や雪の特性とか、そういう学びをつけることによって、ボランティアでなく、それだけでも参加したいという方が結構いらっしやっていて、相乗効果がある。ボランティアもするし、あと学びもできる。そういう組み合わせがあると、サタデースクールにもそういう要素があるのかなと思う。そういったことで、いろいろ考えていくことができれば面白い。

一通り皆さんのお話を伺ったが、やはり具体的にどうつなげていくのか、どういった場があるといいのか、どういった機会があるといいのか、課題としてこういうものがあって、どう解決していくべきなのか等、今後どういう方向性で進むべきなのかということで、人生100年となると、どこに焦点を当てるか大変ということもあるが、非常に根本的なテーマでもあり、もう一回このテーマについて、意見交換を中心に進めていくということで御提案したいと思う。（鈴木委員）

## 7 連絡事項

次回会議は、6月頃を予定。詳細は後日連絡する。（寺崎係長）